

## 第1部 植民地支配のための映画利用

## 第1章 伊藤博文の韓国統治における映画利用

### 1. 時代的背景

19世紀末期に欧米で映画が登場した頃、韓国は世界列強による植民地争奪戦の場となっていた。特に、韓国と満州支配をめぐる日露両帝国主義国間の戦争だった日露戦争を通じて、韓国に対する日本の支配は一段と強化された。

1904年（明治37）8月には、第1次日韓協約が締結され、韓国は日本政府の推薦する日本人財政顧問と外国人外交顧問を傭することを承諾させられた。日露講和条約成立直前の1905年（明治38）7月には、アメリカ陸軍長官タフトと日本の桂首相が協定（Taft-桂協定）を結び、アメリカのフィリピン支配の承認と引換えに日本による韓国の保護及び監督を認めさせた。

日露戦争直後の同年11月、日本政府は伊藤博文を特使として韓国に派遣し、日本軍の脅威の中で第2次日韓協約を結んで韓国の外交権を剥奪した。日本政府は韓国の外交を指揮管理するために漢城<sup>1</sup>に統監部を設置して伊藤を初代統監に任命した。国家主権の基本要件である外交権を奪われた韓国は独立性を喪失し、この時点から日本の保護国となった。

強制的な日韓協約で外交権を奪われた韓国の民衆は、国内外で激しく抵抗した。国内では儒生と農民が中心となって全国で義兵蜂起し、組織的に抗日闘争を続けた。又対外的には1907年（明治40）6月、オランダの首都ハーグで第2回万国平和会議が開かれた時に、韓国の使節として3人が参加して日本による韓国保護国化の不法性を世界に知らせようとしたこともあった。この事件は結局伊藤統監に通報され、使節が皇帝の信任状を持参したことを口実に高宗皇帝<sup>2</sup>は退位させられ、息子の純宗<sup>3</sup>が後を継いだ。

ハーグ密使事件以降、日本の韓国支配の圧力は一層強化され、同年7月に「日韓新協約」ともいわれる第3次日韓協約が結ばれた。これにより韓国政府各部署の次官を全て日本人とし、統監が指揮するようになった。韓国政府の大臣たちは実権を失い、全ての政治は統監の指揮を受ける日本人次官によって行われた。韓国統監府の統監は外交権だけではなく、内政全般にわたる干渉、高級官吏の人事、日本人官吏の任命権を掌握したのである。日韓新協約の中には韓国軍の解散、司法権移譲、警察権委任などの秘密条項もあった。実際に、韓国軍隊は1907年（明治40）8月1日に強制的に解散され、韓国の司法及び監獄事務は1909年（明治42）7月12日に、警察事務は翌年6月24日に委任が調印<sup>4</sup>された。こうして日本の朝鮮植民地支配の強力な土台が構築されるようになった。

日本政府内で韓国併合論が高まっていく中、伊藤博文は既に日韓併合に同意しており<sup>5</sup>、1909年（明治42）6月に統監を辞任した。翌年5月、桂内閣は韓国併合を実行するために陸相の寺内正毅を韓国に送って統監を兼任させた。寺内統監は同年8日日韓併合条約を韓国政府に押付け、ついに韓国を植民地化した。

併合とともに韓国という国号は朝鮮に改められた。韓国統監府は廃止され、その機構を改編して朝鮮総督府が設置された。初代総督に寺内正毅が就任し、朝鮮における法律の制定・公布

の権限、朝鮮軍<sup>6</sup>の指揮権をもつことになった。総督府では治安維持という名分で憲兵警察制度を採り、いわゆる武断政治による植民地支配が始まった。

こういう経過の中で当然韓国の国民や軍部は強く反発した。解散された軍隊の一部は義兵運動に合流して頂点の1908年（明治41）にはその数7万人近くに上り、統監府は激しい抵抗に巻き込まれた<sup>7</sup>。このような韓国の混乱状況は日本にも伝わり、日本国内でも植民地化についての不安感が澎湃した。韓国統監府と日本政府が韓国を植民地化するには何よりも日韓両国民の認識を改めることが先決問題であった。

## 2. 伊藤博文の韓国紹介映画製作と上映

### 伊藤博文の映画に対する目論み

伊藤博文が早くから映画に深い興味を持っていたことが次のエピソードをみるとよく分かる。1897年（明治30）2月、東京の新井商会は歌舞伎座を借りてアメリカから輸入したヴァイタスコープを使用して16本のフィルム試写会を行なったが、伊藤がそこに同席して映写機やフィルムに関心を示し、吉澤商店等に依頼して大磯の別荘で映写会を開いたり、身辺を撮影してもらったりしたことがあった<sup>8</sup>。

伊藤は映画が持つ大衆宣伝への影響力の大きさにも早くから気付き、台湾と韓国の植民地統治において映画を巧妙に利用した。1895年（明治28）台湾が日本の植民地になると、台湾の民衆は強く反発し、激しい抗日闘争が続いた。伊藤博文は不穏な時局の中で台湾人を安定させ、植民地統治に役立つ方法として映画利用を考えた。田村志津枝の『はじめに映画があった』によると、当時落語家で弁士、巡回映写業者としても活躍していた高松豊次郎が『英社戦争実写』を上映した際、伊藤博文はその場に参加し、台湾へ映画を持込むことを望んで次のように述べた。

（前略）とにかく台湾では、まず人心をしずめるのが急務なんじゃ。日本人がどうにも腰がすわっておらん。だから土人をつけあがらすんじゃ。まず日本人の生活を落ち着かせにゃあな。それには娯楽じゃ。娯楽を与えながら日本の文化の高さを思い知らせるんじゃ。活動写真はいい。言葉が通じんでも一目瞭然じゃからな<sup>9</sup>。

高松豊次郎が生前、映画関係者や親族などによく語っていたという上記の逸話から、伊藤博文の映画利用についての考え方が良く覗かれる。その後実際に高松豊次郎は台湾に渡り、1901年（明治34）11月頃、台北西門町台湾日日新報社近くの空地で『英社戦争実写』と他のフィルム十数種を映写した<sup>10</sup>のを皮切りに、台湾全域で巡回映写会を催した。又1904年頃には台湾総督府の後援を受け現地の婦人会と合同で、土匪といわれる抗日武装勢力討伐前線の兵士たちの慰問映写さえ行ない、伊藤の言葉通り、映画を台湾植民地統治に役立てたのである。

### ‘最初の韓国紹介宣伝映画製作と上映

伊藤博文は韓国統治にも映画を利用した。それは台湾の場合よりもっと積極的なもので、既存の映画ではなく、現地事情を紹介する映画を直接製作して日本と韓国で映写して両国国民の時局に対する認識を改めさせようとした。これは植民地統治下で一貫して行なわれた朝鮮人同化を目的とする、宣伝と教化のための映画政策の前段階ともいえるだろう。

韓国統治における伊藤の映画利用の目的を二つ考えることができる。一つは韓国の統治事情を紹介する映画を製作して韓国を植民地化することに対して日本国内での肯定的な世論を作り上げることで、もう一つは韓国国民に日本の優越性を認識させる映画を製作し、韓国人の日本への同化に役立てようとしたものである。

1905年（明治38）日韓協約により統監府が設置され、韓国国内に激しい抵抗が続いて時局が混乱状態に陥ると、日本国内では韓国を植民地化することに対する不安が高まった。そこで伊藤は統監府の統治が上首尾であることを日本国民に知らせ、韓国統治についての否定的な認識を改めようとした。そのためには韓国の平穏な状況を撮影し、日本国内に紹介するのが何よりも効果的であると考えたのである。

そのための映画製作の最初の試みは吉澤商店の撮影技師、小西亮が担うことになった。彼は神奈川県大磯の伊藤の別荘で余興にフィルムを映写したこともあり、伊藤とは既知の関係にあった。韓国統監府から依頼された形で韓国へ出張した吉澤商店の撮影班（店主の河浦謙一も同行）が撮影したのは、小西の回顧談によると主として統治側からみた韓国の平穏な状況であったとい<sup>11</sup>、それは伊藤の宣伝目的の意図を反映したものに違いない。

当時日本では吉澤商店以外に横田商会、Mパテー商会等の映画会社が設立され、製作と興行活動を活発に行っていた。そのうち横田商会も韓国の様子を撮影して日本の常設館に提供したことがある。1907年（明治40）5月17日『韓国風俗』、『統監部園遊会』という映画が同商会の提供で大阪の弁天座で『紅葉狩』、『伊太利の漁夫の生活』、『以外の当選』とともに公開された<sup>12</sup>。恐らくこの2本の映画は記録に残るものとしては、日本において紹介された韓国関連映画の最初のものであり、韓国で撮影された映画のうち一般常設館で上映された最初の映画である。

又、その頃の韓国紹介映画に横田商会の『韓国一週』というのがある。京都の横田商会が韓国で本格的に撮影を行なったのは1908年（明治41）に京城泥岬<sup>13</sup>に出張所を設立してからである<sup>14</sup>。韓国統監府はその出張所と協力して伊藤統監の身辺や韓国の地理風俗等についての映画を製作し、同タイトルで上映した<sup>15</sup>。次はその内容である。

#### 『韓国一週』の映画内容

- 統監邸の園遊会
- 好道園内における伊藤公の真筆
- 倭少台の統監府及統監邸
- 大漢門
- 太皇帝の宮殿

- 南山の公園
- 南大門
- 鐘路鐘楼前の電車の往復
- 皇帝即位式場三紅門内五重の段階
- 加藤清正の持ち帰らんとせし13重の塔
- 独立門（明治27、8年の戦役の結果日本の保護に依りて独立したる記念門）
- 往昔明朝の使を迎えたる迎恩門の旧跡
- 仁川港
- 月尾島と小月尾島（日露戦役の劈頭瓜生艦隊の古戦場）
- 京城の韓国人労働者及一般の風俗の状況
- 朝鮮官妓
- 朝鮮の軽業
- 韓国師範学校の学童（チョンガー）
- 本会員滞在中に於ける暴徒の実況
- 外数種略す<sup>16</sup>

この『韓国一週』の内容も吉澤商店の撮影班が撮影したものと同様に、何れも韓国の平穏さを表す場面と日本人の興味を引くような風景で構成されている。当時の韓国の混乱した政局を隠し、鎮静している様子を強調しようとする統監府の宣伝用であったことが分かる。この映画は1908年（明治41）6月1日から17日間、神田錦町の錦輝館で横田商会の第16回目の映学会として、『常宮竹田宮御慶事両殿下御参内実況』、『證據の外套』、『始めて吸った煙草の味合』、『近眼者の懐中時計』等十数種の短編映画と共に上映された<sup>17</sup>。

### 純宗皇帝と伊藤博文の韓国巡幸と『韓国観』の製作

横田商会の初期の代表作として1909年（明治42）に製作された映画『韓国観』は、純宗皇帝と韓国統監伊藤博文が韓国を巡幸する模様を撮影したものである。

韓国に統監府を設置後3年が過ぎた1909年（明治42）の初め、まだ抗日闘争は続いており、地方は疲弊して民心が荒んでいた。伊藤は民心を一新するために純宗皇帝と共に地方の実情を視察しながら民衆を啓蒙することを計画した。同年1月2日伊藤は韓国政府の総理大臣李完用<sup>イ・ワンヨン</sup><sup>18</sup>を招き、天皇が明治初年に日本各地を巡幸した例を挙げて皇帝の地方視察を慫慂した<sup>19</sup>。

結局皇帝はその勧誘を受け入れ、同年1月の酷寒期に民生を視察するという名分で巡幸の途に上った。地方巡幸は2回に分けて行われ、1月7日から同月13日までは大邱、釜山、馬山の南韓地域を、1月27日から2月3日までは平壤、新義州、義州、定州、黄州、開城の北韓地域を回った。至る所で官民、特に当地の郡守、両班<sup>20</sup>、儒生等が大勢動員され、皇帝と伊藤一行のための歓迎会が行われた。

巡幸の目的として新しく皇帝に即位した純宗の民生視察を標榜したが、真の目的は統監伊藤

博文が韓国民衆を集め、統監政治の新施政を韓国の民衆に知らせることにあった。それは伊藤が各地で民衆を対象に行った以下のような演説の内容をみると明らかになる。

－演説の題名及び内容

○1月7日 大邱歓迎会の演説

＜韓国陛下の巡幸＞―日韓両国民の親和について

○1月8日 釜山歓迎会の演説

＜韓帝御巡幸に随行して所懐を述ぶ＞―統監の任務と日韓両国の親和について

○1月10日 馬山歓迎会の演説

＜日韓国防上に於ける鎮海湾の価値＞―日韓両国の防禦上要衝地であること

○1月12日 大邱理事官官舎に於ける郡守、両班、儒生に対する訓示

＜日本の目的は韓国の扶植に在り＞―韓国の富強のための統監府の施政について

○2月2日 開城歓迎会の演説

＜韓国保護の要を痛感す＞―日韓親睦と日本の統監府による保護政策について<sup>21</sup>

純宗皇帝の地方巡幸は翌年の日韓併合に先立って綿密に計画されたものである。『伊藤公全集、第二巻』によると明治天皇も伊藤の意図を理解し、韓国の皇室と国民の歓心を買うと共に日本の勢力を誇示するために、皇帝の釜山到着前日に日本海軍第一及び第二艦隊を釜山に廻航することを命じて皇帝一行を迎えさせた。巡幸4日目の1月10日皇帝は伊藤を始め日韓の文武官を随えて釜山湾内に碇泊中の第二艦隊旗艦吾妻を訪ね、午餐の饗応を受けた。又その午後には馬山湾碇泊中の第一艦隊旗艦香取に乗船し、艦隊練習状況を観覧した<sup>22</sup>。

こうした皇帝と伊藤の地方巡幸は日韓両国向けの宣伝目的で映画にまとめられた。横田商会が映画製作の依頼を受け、同商会の撮影技師福井繁一が巡幸に同行して撮影を担当した<sup>23</sup>。この映画も上記の演説を参考にすると単純な記録映画ではなく、韓国統治についての宣伝と日韓融合の必要性を強調するために作られた宣伝映画であったことが分かる。『韓国観』と名付けられたこの映画は翌年の1910年（明治43）韓国にも伝えられ、皇室を始め、赤十字社、愛国婦人会等の主催で紹介された<sup>24</sup>。

映画史における『韓国一週』及び『韓国観』の記述について

韓国映画史の文献中に『韓国一週』と『韓国観』について記述されているものはまだ知られていない。当時の新聞に推測できるような簡単な記事しかない。日本映画史に関する文献の中でこの2本の映画に関して記述しているのは田中純一郎の『日本映画発達史Ⅰ』、『日本映画発達史Ⅱ』及び『日本教育映画発達史』があり、後日の他の文献はそれを引用している。そこでは『韓国一週』と『韓国観』が韓国皇帝と伊藤博文の地方巡幸を記録したものであり、1908年（明治41）製作されたことになっている。しかし、当時の新聞の記事や韓国歴史上の事実からみると相違点があり、ここに言及しておきたい。

『日本映画発達史Ⅰ』の「第二章創業期」の中で『韓国観』について以下のように書かれている。

土屋（横田商会のカメラマン土屋常二のこと）が商会を去り、福井繁一がその跡を継いでから、朝鮮の京城日報社の依頼で、李王殿下と伊藤博文の朝鮮一巡の模様を撮影したことがある。四十一年（明治）六月一日錦輝館で興行された『韓国観』がそれだ<sup>25</sup>。

『日本映画発達史Ⅱ』の「第十章近代の終焉」の中にも同様の記述がある<sup>26</sup>。又『日本教育映画発達史』の「第二章初期の記録と宣伝」の中に『韓国一週』について次のように記述している。

韓国一週（又は『韓国観』）京城日報社企画、横田商会製作、撮影福井繁一。李王殿下と伊藤博文が韓国を一巡したときの記録（明治四一・六・一、錦輝館）<sup>27</sup>

上記の記述では当時の資料を分析した本稿の内容と比べると三つの疑問点が生じる。一つは『韓国観』の製作年が1908年（明治41）になっていることと、二つには上記の『韓国一週』の内容が韓国皇帝と伊藤博文の地方巡幸を撮ったものとされている。三つには『韓国一週』と『韓国観』が同一のものになっていることである。

韓国皇帝と伊藤博文の地方巡幸を撮った『韓国観』の製作年については、巡幸が行われたのが前述のように1909年（明治42）であるので、製作年が違っていることがわかる。又『韓国一週』は田中純一郎の記述から韓国皇帝と伊藤博文の地方巡幸を撮ったものではない。その理由としては、『韓国一週』が横田商会の1908年（明治41）京城出張所の開設と共に製作されたし、前述のように錦輝館で上映された当時の宣伝チラシの内容も巡幸とは全く別のものであるからである。

『韓国一週』と『韓国観』のタイトルの混用については『キネマ旬報』の『日本映画史素稿』に紹介されている当時の新聞の広告をみると説明できる。そこでは『韓国一週』が『韓国観』というタイトルになっており、‘本会員渡韓中撮影せしものにして同国の事情風俗等映写時間一時間余の長尺’<sup>28</sup>と紹介されている。初期の実写映画には固有のタイトルが決まっていないうものも多く、『韓国観』も上映場によって混用されたものと思われる。

### 3. 韓国皇太子の日本留学を通じての映画宣伝

#### 皇太子渡日光景の映画化

1907年7月19日に高宗の次男李<sup>イ</sup>拓<sup>タク</sup>が帝位を継承して純宗皇帝になり、同年8月7日には皇帝の弟である英親王が皇太子<sup>29</sup>に立てられた。伊藤博文は10歳になるこの幼い皇太子を日本で教育することによって、両国永遠の親和を図るという名分をもって<sup>30</sup>、東京へ長期間留学させようと

した。しかし、伊藤の本心は当時韓国を巡る世界列強国の中で優位に立ち、韓国人を日本に同化し、将来植民地化するには皇太子を日本に滞在させることと、それをきっかけに日本の状況を韓国に周知させることが最も効果的であると考えたのである。

皇太子の生母である嚴妃を始め、多くの皇室関係者と韓国の国民は皇太子の長期間に渡る日本留学を不安に感じ、反対の声が高かった。それに対して伊藤は韓国皇太子の日本留学に先立ち、韓国の皇室と国民に日本への親近感を与え<sup>31</sup>、皇太子留学に対する否定的な世論を抑えようと日本の皇太子（当時嘉仁親王、後の大正天皇）の訪韓を計画した。明治天皇は、韓国の混乱した政局と治安の不安を理由に難色を示したが、徹底した警護計画と有栖川宮威仁親王も同行するという伊藤の計画に承諾した<sup>32</sup>。

嘉仁親王は1907年（明治40）10月10日、有栖川宮威仁親王、陸軍大将桂太郎、海軍大将東郷平八郎等と共に東京を出発し、軍艦「香取」に乗って同月16日韓国の仁川港に着いた。韓国の純宗皇帝と皇太子は仁川まで足を運んで一行を迎えた。

嘉仁親王は統監邸に滞在して李完用総理以下各大臣を招いて勲章を授与した。又皇室を訪問して韓国の皇帝には大勲位菊花章頸飾を、皇太子には勲一等旭日桐花大綬章を贈った。皇太子英親王は日本皇太子の韓国滞在中、故宮観覧や公式行事等に同行し、10月20日の帰国時には仁川港まで見送った。

伊藤博文の日本皇太子訪韓計画はこのように実現され、結果的には韓国皇太子の日本留学へとつながった。韓国皇帝は11月19日、皇太子に日本留学を正式に命じ、伊藤を皇太子の教育を担当する太子大師に任命した<sup>33</sup>。日本皇太子の訪韓の目的は十分達成されたのである。

12月5日、韓国皇太子は伊藤と共に仁川港から日本軍艦「満州丸」に乗って、玄海灘を渡った。日本留学とはいえ、政治的な人質<sup>34</sup>として連れていかれる幼い皇太子について、皇室だけではなく国民の心配は一方ならなかった。翌日6日から韓国の日刊新聞には予測できない皇太子の帰国のことを連日推測記事として掲載している。

皇太子の日本留学中、太皇帝陛下（高宗）と大皇帝陛下（純宗）に時々ご機嫌伺いに帰国するとのことだ<sup>35</sup>。

皇太子が太皇帝陛下と大皇帝陛下に時々ご機嫌伺いに帰国はするけれども日本に滞在する期限は8年或いは10年だということだ<sup>36</sup>。

皇太子殿下は来年6月夏休みの期間に暫く帰国するとのことだという<sup>37</sup>。

これは皇太子の日本留学についての韓国国民の不安と無事帰国への関心を表しているといえよう。伊藤博文はこうした韓国人の心配を払拭するのにも映画を利用しようと日本留学中の皇太子の様子を一々フィルムに残したのである。それらは渡日の際に受けた歓迎の光景、留学中の日常生活場面、地方巡啓の実況の三つに大別できる。

先ず伊藤は皇太子が渡日の際に日本各地で受けた歓迎の光景や滞在の様子を映画に製作するようにした。下関に到着後、東京の芝離宮にある居所までの途上、各地での歓迎行事は実に盛大に行なわれた。当時の資料からその光景が浮び上る。

12月7日下関に到着した皇太子と伊藤博文一行は臨時特別列車に乗り、途中各地で宿泊しながら上京した。京都に立ち寄ったときには、駅舎で韓国留学生達が日韓両国旗を掲げて万歳三唱を唱え、日本人生徒2千余名、清国留学生数十名が出迎えた<sup>38</sup>。

15日に東京新橋駅に到着した皇太子一行を迎える歓迎の人波はさらなるものであった。新橋駅には韓国を訪れて面識のあった日本の皇太子や有栖川宮威仁親王をはじめ、内閣総理、大臣以下百官（高等官以上）、桂、乃木各大将そして大勢の市民達が出迎えた。日比谷公園で発せられる礼砲の響く中、日韓両国旗を先頭に掲げた臨時特別列車から伊藤博文と並んでプラットホームに降りた皇太子は、韓国軍少尉の正装に日本皇太子が訪韓の際に贈った勲一等旭日桐花大綬章と数個の勲章を佩びていた。左に有栖川宮威仁親王、右に伊藤博文と相並び、ホームに出迎えた長い歓迎行列の前を始終会釈しながら通った。その幼顔に、両親の下を離れた心を察して涙を流した女性も少なくなかったという<sup>39</sup>。近衛第3、4連隊、近衛軍楽隊、歩兵、砲兵、騎兵隊に護衛されながら、韓国皇太子は親王と伊藤と共に馬車に同乗し、居所の芝離宮までパレードした。道路の両側には数え切れない歓迎の人波に満ちており、万歳の歓声が絶え間なく挙がった。

伊藤が12月18日に皇太子と共に皇居に入城した時には、明治天皇が「鳳凰の間」の玄関まで出迎えた。これは当時においては極めて異例なことであったといわれており、新しい日韓関係を意識してのことに違いない。日本留学に関して詳細な報告を受けた天皇は韓国皇太子を日本へ連れてきた伊藤の労苦に対して酒肴料として金1千円を下賜した<sup>40</sup>。

伊藤による韓国皇太子の日本留学はこのように実行され、日韓親和という狙いは少なくとも日本国内においては成功を収めた。それについて当時の『朝日新聞』は次のように報じている。

このお可愛らしい殿下を斯くまで盛んに歓迎し奉ったことがどれ位韓国の民心を和らげ日韓両国の関係を改善するかと考えて見ると嬉しくて堪らぬ<sup>41</sup>。

しかし、韓国の皇室と国民は皇太子の渡日についてその目的が留学だけにあるとは思っていなかった。前述したように政略的に日本に連れられたとされており、皇太子の安否についての関心が高まった。伊藤は韓国内に澎湃した不安感を鎮静させるために皇太子の渡日の光景を映画に作って、韓国の皇室と国民に披露しようとした。

皇太子の日本到着から芝離宮までの模様の撮影は京都の横田商会が撮影し、映画にまとめた。そして、この映画を横田商会が翌年の1908年の春、京城泥岬に出張所を開設したのに合わせて、韓国皇室に献上した。又横田商会は同年4月15日昌徳宮<sup>42</sup>で上映会も催した<sup>43</sup>。これについて当時の韓国の日刊新聞は次のように報じている。

活動写真御覧—日本京都横田商會が我が皇太子殿下が各地ご滞在中の各種活動写真を御覧に入れた。旅館にご滞在の實地状況、旅館から七条停車場にお着きになる光景、新橋停車場に到着後、芝離宮までの歓迎の状況、離宮で遊ばれる状況を撮影した。横田商會が今度、京城泥岨に出張所を開設して、その活動写真と他に奇異なもの数十種類<sup>44</sup>を皇帝陛下に御覧に入れるそうだと<sup>45</sup>。

日本に渡った皇太子の姿、しかも拳國的な歓迎を受けている臨場感溢れる映画を見た韓国の皇族と国民は少しは安堵したに違いない。横田商會はこの映画を製作して韓国で上映したことを契機に、伊藤博文と統監府から韓国統治関連の宣伝映画の製作を任されることになる。前述の『韓国一週』（1908）と『韓国観』（1909）がその代表的な例として挙げられる。

ここで特記したいのは、皇太子渡日関連の映画がその一部ながら現存する可能性があるということである。1968年文化庁芸術祭主催で「映画の歴史を見る会」という上映会が催された。その行事のプログラムに『ありし日の伊藤博文』のタイトルが目を引く。次の文章はその内容である。

明治の元勳伊藤博文公の面影（おもかげ）を伝える明治四十年～四十二年の實写記録、日韓合併の前に来日する朝鮮皇太子と伊藤博文、大磯における伊藤公、日比谷国会議事堂付近の光景、伊藤公のハルピン到着と暗殺前後の實況が特集されている。

上映時間10分程のこの古いフィルムの中にある皇太子と伊藤博文関連の部分は、上記の皇太子渡日光景の一部ではないかと思われる。

### 皇太子の日常生活の映画化

皇太子の日本留学の日々が続くと、韓国の国内では皇太子の安否を心配する声絶えなかった。さらには皇太子が日本に連れさられて毒殺されるとか、もう殺されたのではないかといった噂が飛び交っていた。伊藤博文は急遽、吉澤商店の河浦謙一を呼び、皇太子の日本における動静を實写し、それを韓国民衆に見せたい旨を述べた。そして河浦は小西亮と共に皇太子の日常を撮影することになった<sup>46</sup>。『日本教育映画発達史』の次の記述はその一つの例である。

韓国皇太子邸の活動写真會——昨夜は韓国皇帝陛下の御誕生日につき、鳥居坂<sup>47</sup>の皇太子御用邸にては、我國務大臣及び宮内省高等官数十名に晚餐を賜わり、手品及び活動写真の余興あり。活動写真は韓国兩陛下に御覧に入れるため、去る七日新橋の吉澤商店に命じて撮影せしめし殿下の御乗馬、ブランコ、兵式体操、御苑内の鹿狩り、鞠投げ、御散歩、苑内の松林や小山を陣地とせし突貫の演習、テーブルのお菓子召上がらるる御模様などなりしかば、殿下には殊の外のお喜びにて、陪觀者の喝采鳴りも止まざりしという<sup>48</sup>。

上記の映画は早速韓国の皇室に渡され、同年4月2日の夜に徳壽宮で上映された。この上映会には皇太子の父親の太皇帝（高宗）と諸大臣が観覧した。当時の韓国の新聞にその映画の内容について、皇太子が東京で鹿狩りをする場面や運動する姿が映っていると<sup>49</sup>紹介されており、上記の日本の新聞が報じたのと同様の映画であることが分かる。

その後も、東京の苑内にいる皇太子の日常生活や大磯の海岸で伊藤博文と過ごしている皇太子の姿等<sup>50</sup>が映画に収められて韓国で折にふれて上映され、政略的に利用されたのである。

### 東北・北海道巡啓と映画利用

当時、皇太子は「明治四十一年一月八日から明治四十三年十二月二十五日まで、家庭教師につき尋常高等小学校全科及び中等科第一学年課程」<sup>51</sup>という教育を受けていた。その期間中伊藤博文は皇太子と共に夏休みを利用して日本国内の巡啓を計画した。それは皇太子に日本各地の発展状況や軍事力を見学させて強大国としての威勢を体験させ、自然環境から日本への親近感を覚えさせる狙いがあった。

又その巡啓を映画に記録して日韓両国民に紹介し、韓国皇太子の日本留学の意味と日韓融合の必要性を理解させようとした。伊藤は宣伝ばかりではなく民衆教化のためにも映画を積極的に利用したのである。

巡啓は二回に分け、1908年（明治41）8月8日から21日までは関西地方を、翌年8月1日から23日までは東北・北海道を廻った。関西旅行はまず横須賀軍港から始まり、名古屋を経て大阪兵器製造所、大阪造幣局等を見学し、神戸港で軍艦満州丸に乗って軍港のある呉とを旅した。そして奈良、岐阜等を観光して大磯にある伊藤の別荘に戻り、終了した。

関西旅行を終えて東京に戻った皇太子と伊藤は9月1日に皇居に招かれた。旅行の話聞いた明治天皇は皇太子の活躍を褒め活動写真機セットを贈った<sup>52</sup>。皇太子はこのカメラで翌年の東北・北海道旅行を自ら撮影し<sup>53</sup>、伊藤の大磯の別荘で映写したこともあった。又天皇から活動写真機セットを贈られたことが契機となって晩年までフィルムの映写が趣味活動の一つになったという<sup>54</sup>。

1909年（明治42）8月1日、皇太子と伊藤は東北・北海道の巡啓に向けて東京の上野駅を出発した。それは水戸、仙台、盛岡、青森、函館、小樽、札幌、室蘭、秋田、山形、福島を順次廻り、23日東京に戻るといいう長い旅程であった。

旅行中至るところで官民の盛大な歓迎会があり、伊藤は行く先ごとに皇太子の日本留学の意味、日韓融合、東洋の平和などのテーマで演説を行った。伊藤は韓国人だけではなく、日本人にも今後の日韓の新しい関係のために日韓融合が必要であることをこの旅を通じて説いて回ったのである。特に、旅行初日に水戸で行われた「韓国皇太子留学の経緯と日韓の融和」という演説では日韓関係を兄弟に比喻しながら、お互いの融合<sup>55</sup>を強調している。東北・北海道旅行の日程と演説のテーマは次のようである。

- 8月1日 水戸 <韓国皇太子留学の経緯と日韓の融和>
- 3日 仙台 <国力の発展>
- 4日 盛岡 <日韓融合>
- 5日 青森 <憲法制定の経過と党争の弊>
- 6日 函館 <日韓の関係>
- 7日 小樽 <日韓の融合と韓国皇太子の留学>
- 9日 札幌 <国威伸張に伴う責任の増加>
- 16日 室蘭 <室蘭港発達を望む>
- 18日 秋田 <奥羽地方の発達を望む>
- 19日 山形 <極東平和の必要>
- 20日 福島 <東洋の平和><sup>56</sup>

伊藤は吉澤商店に命じて皇太子の東北・北海道巡啓を映画に収めさせた。下命に応じてカメラマン小西亮が巡啓に随行し、行く先々の実況を撮影した。完成した約2千尺のフィルムはすべて韓国皇室に送られ<sup>57</sup>、一般韓国民の宣撫<sup>58</sup>のために公開された。

東北・北海道巡啓の映画は日本でも上映された。記録に残っている最初の上映会は巡啓が終わって間もない1909年（明治42）9月8日に東京で行なわれている。当時韓国では太皇帝（高宗）の誕生日である9月8日を「万寿聖節」と称し、祝日として記念した。皇太子は伊藤博文の祝賀を受けた後、余興の時間に東北・北海道巡啓フィルムを観覧した<sup>59</sup>。

韓国皇室に送られた東北・北海道巡行フィルムの内容は以下のようなものである。

- 塩釜より松島御往復の船中にて松島各島の変化
- 新冠御料牧場にて種馬御覧の光景
- 同所若馬運動の実況
- 同所米国式大農法により牧草刈取りの光景
- 同所競馬場にての観覧
- 宮城県金華山沖捕鯨事業の活動
- アイヌ婦人の競馬等御照覧の光景
- その他アイヌ土人の漁業
- 帰りの軍艦での御逍遙の光景並びに同艦連射砲発射操練の実況
- 福島県庁裏の阿武隈川で催されたる水泳、飛び込みの実況
- 軍艦で帰港して有栖川宮殿下御別邸御滞在中自動車に召され猪苗代湖畔16橋御通過の光景<sup>60</sup>

#### 4. 皇太子関連映画の上映における特徴

1907年（明治40）12月に日本に渡った皇太子の関連映画は1909年（明治42）末までの2年間にわたって集中的に製作された。それが韓国に送られ、上映されたのは1908年（明治41）の3月からである。当時の文献資料を中心に韓国映画初期における皇太子関連の映画上映の特徴を、映画の受給、上映、狙いの三つに分けて整理することしよう。

1. 日本滞在中の皇太子関連の映画は韓国の皇室と婦人会等に渡されたが、その殆どが献上及び寄贈の形で贈られたのが特徴である。先ず皇室に対しては、横田商会、吉澤商店の製作社が皇太子渡日の光景、東京における日常生活、東北・北海道巡啓等についての映画を下命により製作し、完成したフィルムを献上した。愛国婦人会<sup>61</sup>、慈善婦人会、赤十字社等に対しては皇太子と伊藤博文により直接寄贈<sup>62</sup>された。韓国に紹介された皇太子関連映画のうち新聞で確認できる最初のもも、麻布苑内で運動している姿を撮った映画を皇太子自らが愛国婦人会韓国本部に寄贈したのである<sup>63</sup>。又皇太子渡日の光景や東北・北海道巡啓等のフィルムは伊藤が愛国婦人会等にも寄贈して一般人向けの映写に使わせた。

2. それらの映画は皇族と一般民衆を対象に数多く公開された。皇族向けの上映会は純宗皇帝の居所である昌徳宮と太皇帝（高宗）の居所の徳壽宮で開かれ、上映会には皇帝と共に必ず諸大臣、貴族及び統監府の幹部が同席した。又婦人会や赤十字社による上映会は皇室でも開かれたが、募金策の一環として官人倶楽部、青年会館等の公共の場所で一般向けに行なわれる場合も多かった。社会団体の中でも特に愛国婦人会主催の上映会が盛んに行なわれ、全国に組織されていた支部を利用して各地方でも皇太子関連の映画を上映した。

皇太子関連の映画の上映会は宣伝目的のために統監府が積極的に介入した。皇室で映写する場合は統監府の通訳官を派遣し、映画の説明に当たった。愛国婦人会主催の場合でも宣伝効果を高めるために統監府が深く関与した。そのことは1908年6月24日愛国婦人会韓国本部の主催で、京城の官人倶楽部で皇太子関連の映画を上映した時の統監府の介入状況をみるとよく分かる。

映画を上映するに当り、先ず新聞に観覧を誘う告知を掲載し<sup>64</sup>、上映の前日には内務大臣 ソン ビョンジュン 宋秉峻が弁士 ジョン ウンボク 鄭雲復、キム サンイン 金祥寅、演説者に内定された韓錫振<sup>65</sup> ハンソクジン 3人を内務部に呼んで、映画に関する説明内容と上映場での演説内容についての統監府の方針を教育した<sup>65</sup>。又当日上映前に統監府では軍楽隊まで動員して雰囲気をもたせようとした。これもやはり上映の最大目的である宣伝の効果を上げるためであった。その夜映画を通じて皇太子の様子を見た観客の興奮と感動について当時の新聞に報じられている内容から、上映の効果がいかなるものであったかを窺い知ることができる。

写真会盛況—愛国婦人会が前報の如く活動写真会を一昨日午後8時に官人倶楽部で設けしたが、韓国軍楽隊の爽快な演奏と蓄音機の音の中、満員で入場が謝絶された。国民新聞社長韓錫振氏がその会の趣旨を詳細に説明したが、我が皇太子殿下が活動する写真が

現出するに至り、満場人士の万歳の声が湧いて歓に極まる余り感泣する者さえもあった。11時に無事散会した<sup>66</sup>。

3. 日本留学とはいえ、祖国を離れて他郷で暮らす皇太子に対する皇室と民衆の心配はこの映像を見て和らいだに違いない。しかし、伊藤博文が韓国の皇室と国民に皇太子関連の映画を積極的に紹介したのは皇太子の安否を伝える以外に、もっと大きい狙いがあったのである。日本の皇族や高官達が韓国の幼い皇太子に甲斐甲斐しく仕える場面をもって韓国の国民に安堵感を与え、日本に対する親近感さえ与えようとした。又、皇太子関連の上映会で日本の風俗、自然景観、日本海海戦、大規模な軍事訓練等の映画を同時に紹介し、強大国としての面貌を誇示した。それらは日韓併合を念頭に置き、新しい関係のための日韓融和の必要性を映画を通じて認識させようとしたに他ならない。

伊藤が東北・北海道の旅から戻って間もなくの満州の旅で帰らざる客となってからは皇太子関連の映画も作られなくなった。しかし、翌年の日韓併合以降の朝鮮総督府の同化政策、内鮮融和及び皇民化政策における一連の映画利用に伊藤が至大な影響を与えたことは否定できない。映画の草創期にも関わらず伊藤は映画利用において実に積極的であり、先駆者でもあったのである。

## 第1章

- <sup>1</sup> 当時のソウルの名称、日韓併合以降は京城と正式に変更された。
- <sup>2</sup> 高宗は1863年朝鮮第26代の王として即位、1897年国号を大韓帝国（韓国）に変更して皇帝となり、1907年7月20日ハーグ密使事件により退位した。以降、太皇帝と称されたが、1910年8月27日の日韓併合により、朝鮮の李太王とよばれた。
- <sup>3</sup> 高宗の次男で朝鮮27代目の王になるが、日韓併合とともに全ての権限を天皇に譲与し、李大王と称された。
- <sup>4</sup> 朝鮮総督府『施政二十五年史』1935年、4、5頁。
- <sup>5</sup> 小松緑『伊藤公全集第三巻』伊藤公全集刊行会、1927年、209頁。
- <sup>6</sup> 当時韓国に駐屯した日本軍のことで、規模としては1個師団、1個旅団、騎兵派遣隊4個中隊の軍隊と2,000余名の憲兵が駐屯していたが、義兵運動が最高に達した1908年5月に第2327連隊と、憲兵補助員4,000余名、警察隊5,000余名が増強された。金雲泰『日本帝国主義の韓国統治』、博英社、1986年、134～135頁、引用原本は『朝鮮暴徒討伐誌』を参照。
- <sup>7</sup> 反日義兵運動（1907～1911年）

年	戦闘回数	参加義兵数
1907（明治40）	323	44,116
1908（明治41）	1,451	69,832
1909（明治42）	898	25,763
1910（明治43）	147	1,891
1911（明治44）	33	216
合計	2,852	141,818

出典：姜在彦『日本による朝鮮支配の40年』朝日新聞社、1992年、43頁を参照。

\* 1907年は8～12月の集計、1911年は1～6月の集計

- <sup>8</sup> 田村志津枝『はじめに映画があった』中央公論新社、2000年、18頁、引用原本は吉山旭光『日本映画界事物起源』参照。
- <sup>9</sup> 前掲書、『はじめに映画があった』、41頁。
- <sup>10</sup> 市川彩『アジア映画の創造及び建設』国際映画通信社、1941年、86頁。
- <sup>11</sup> 田中純一郎『日本教育映画発達史』蝸牛社、1979年、23頁。  
この引用文の内容は、田中純一郎が1942年（昭和17年）10月26日に、小西亮が勤務先の東洋現像所の用事で大阪から上京した時に東京銀座のあるレストランで初対談し、その回顧談を整理したものである。なお吉澤商店の撮影班が韓国で撮影したフィルムについての詳しい状況は伝わっていない。
- <sup>12</sup> 「日本映画作品総目録第1集」『キネマ旬報別冊』キネマ旬報社、1960年、41頁。
- <sup>13</sup> 当時の京城泥岬は現在ソウルの南山の麓にある明洞で、日本人の集団居住地であった。
- <sup>14</sup> 『皇城新聞』1908年3月28日、2面。
- <sup>15</sup> 「日本映画作品総目録第1集」『キネマ旬報別冊』キネマ旬報社、1960年、44頁。
- <sup>16</sup> カタログ『展覧会映画遺産－東京国立近代美術館フィルムセンターコレクションより』独立行政法人国立美術館/東京近代美術館、2004年、16頁。
- <sup>17</sup> 同上。
- <sup>18</sup> 植民地化を積極的に支持した韓国の親日官僚で、その功勞で日韓併合と共に伯爵の号を受けける。韓国では「乙巳五賊」として売国奴とされている。
- <sup>19</sup> 金子堅太郎『伊藤博文傳下巻』統正社、1940年、800～802頁。
- <sup>20</sup> 朝鮮時代の身分階級制の中で賤民に相対する階級。
- <sup>21</sup> 小松緑『伊藤公全集第二巻』伊藤公全集刊行会、1927、474～494頁を参考に作成。
- <sup>22</sup> 同上、193～194頁。
- <sup>23</sup> 前掲書、『日本教育映画発達史』、24頁。
- <sup>24</sup> 『慶南日報』1910年5月14日。

- 
- <sup>25</sup> 田中純一郎『日本映画発達史Ⅰ』中央公論社、1957年、132頁。
- <sup>26</sup> 田中純一郎『日本映画発達史Ⅱ』中央公論社、1957年、329頁。
- <sup>27</sup> 前掲書、『日本教育映画発達史』、24頁。
- <sup>28</sup> 「日本映画史素稿」『キネマ旬報』、1937年6月11日、613号、84頁。
- <sup>29</sup> 純宗は病弱で子がなく、高宗皇帝の第四王子の李垠が皇太子になる。日韓併合とともに王世子に称された。
- <sup>30</sup> 李王垠伝記刊行会（代表、有末精三）『英親王李垠伝』図書出版共栄書房、1978年、66頁。
- <sup>31</sup> 久米正雄『伊藤博文伝第15巻』改造社、1931年、368頁。  
日本皇太子の韓国訪問のことはこの本に記述されているように‘韓国人に親近感を与える’というのは名分であり、韓国皇太子を日本に連れて行くために韓国皇室に対する圧力用であった。
- <sup>32</sup> キーン、ドナルド『MEIJI TENNO』タラゴン社、ムックン訳、2002年、419頁。
- <sup>33</sup> 前掲書、『伊藤博文傳下巻』780頁。
- <sup>34</sup> 前掲書、『MEIJI TENNO』、418頁。
- <sup>35</sup> 『大韓毎日申報』1907年12月6日、1面。
- <sup>36</sup> 『大韓毎日申報』1907年12月7日、1面。
- <sup>37</sup> 『大韓毎日申報』1907年12月8日、2面。
- <sup>38</sup> 『大韓毎日申報』1907年12月17日、2面。
- <sup>39</sup> 前掲書、『英親王李垠伝』、73頁。
- <sup>40</sup> 前掲書、『伊藤博文傳下巻』、782頁。当時千円は白米200石以上の価値があった。
- <sup>41</sup> 『朝日新聞』1907年12月16日、4面。
- <sup>42</sup> 当時昌徳宮は純宗皇帝（大皇帝とも言われた）の居所で、徳壽宮は高宗（太皇帝）の居所であった。
- <sup>43</sup> 『皇城新聞』1908年4月17日、2面。
- <sup>44</sup> カタログ『展覧会映画遺産－東京国立近代美術館フィルムセンターコレクションより』独立行政法人国立美術館/東京近代美術館、2004年、17頁
- 横田商会在札幌大黒座で1908年度第二回目の上映会（5月7日から7日間）を行い、当時の宣伝チラシが上記の資料に載っている。それによるとチラシの中に紹介されている映画が4月15日に（韓国の新聞記事と一致）韓国皇室で上映したものとなっており、‘奇異なもの数十種類’のリストとその内容が分かる。
- <sup>45</sup> 『皇城新聞』1908年3月28日、2面。
- <sup>46</sup> 前掲書、『日本教育映画発達史』、24頁。
- <sup>47</sup> 皇太子は1908年2月9日居所を芝離宮から鳥居坂御用邸に移した。
- <sup>48</sup> 前掲書、『日本教育映画発達史』、24頁。
- <sup>49</sup> 『大韓毎日申報』1908年4月4日、2面。
- <sup>50</sup> 前掲書、『日本教育映画発達史』、23頁。  
この頁に1908年（明治41）に撮影された大磯海岸の皇太子の姿のフィルム四コマが掲載されている。
- <sup>51</sup> 前掲書、『英親王李垠伝』、1979年、101頁。
- <sup>52</sup> 同上、80頁。
- <sup>53</sup> 『大韓民報』1909年9月14日、2面。
- <sup>54</sup> 前掲書、『英親王李垠伝』、80頁。
- <sup>55</sup> 平塚篤『伊藤博文演説集』春秋社、1930年、244頁。
- <sup>56</sup> 同上。
- <sup>57</sup> 『活動写真界』日本活動社、1909年、第三号、15頁。
- <sup>58</sup> 前掲書、『日本教育映画発達史』、24頁。

- 
- <sup>59</sup> 『皇城新聞』 1909年9月10日、2面。
- <sup>60</sup> 『活動写真界』 日本活動社、1909年、第三号、15頁と『毎日申報』 1912年5月15日、2面を参考にして作成したもの。
- <sup>61</sup> 1906年1月愛国婦人会韓国支部を設立し、韓国統監府構内日本赤十字社朝鮮本部内に置かれた。日韓併合と共に愛国婦人会朝鮮本部と改称し、遺族後援や軍慰問等の軍事後援を行った。
- <sup>62</sup> 『皇城新聞』 1908年3月24日、『毎日申報』 1912年5月15日、同月17日。
- <sup>63</sup> 『皇城新聞』 1908年3月24日 ‘皇太子は日本留学時麻布苑内で運動状況を撮影した活動写真を愛国婦人会韓国本部に下賜された’ という記事が載っている。
- <sup>64</sup> 『皇城新聞』 1908年6月24日。
- <sup>65</sup> 同上。
- <sup>66</sup> 『皇城新聞』 1908年6月26日。